

きびがら細工 (其二)

東京女高師訓導 山形 寛

一、はしがき

きびがら細工は近頃可なりな勢で普及しかけて居り、之に關する記事も二三の雑誌に發表せられたのを見た。私も之に關して一度雑誌兒童教育にその價值及び工作法の大要を載せたことがある。然しそれは個々の教材に就ては述べることが少く例として三四を擧げたのに過ぎなかつたのである。茲では主として代表的の教材に就て工作法の大要を述べやうと思ふが、説明の順序として多少は、その細工の價值なり性質なりも述べなければ充分に考へて居る處が盡せないから、前に雑誌兒童教

育に載せたのと多少の重複する處があるかも知れないが、その點は豫め御斷りして置く。

「きびがら」と云ふのは黍の幹であるが、普通に黍と呼ばれて居るものは、學名は兔に角として地方によつて多少異なつたものを指されて居る様である。目下細工に用ひられてゐる「きびがら」は、主として滿洲産の「かうりよう」の幹である。然し内地産の「たかきび」又は「たうもろこし」等の幹でも充分に使へると思ふ。賣品としてある「きびがら」は、徑一センチメートル内外から二センチメートル内外のものを、長さ約十八センチメートル位

に切り、約十本位を一把として九錢か十錢位に賣つて居るのである。そして一把の中には皮をとつたものと皮のついたまゝのものがあり、皮をとつたものは赤、青、黄、緑、紫等の色で染めてあるのが普通である。

二 きびがら細工の價值——長所短所

「きびがら」細工はその性質が豆細工に似て居る然しそれよりも工作が一層簡易であり、且つ自由であるばかりでなく、豆細工では到底企て及ばない種類の工作をも含むものである。換言すれば豆細工のあの數學的な構成的な、そして遊戯的な長所をそつくり持つ上に、紙も粘土も持つて居ない所の或種の表現に對する可能を有し、おまけにその作品は甚だ素朴の感があり、又大味な所がある。もつと具體的にその長所を述べれば、

一、皮を去つた幹は、小刀でも、鋏でも、竹篋でもきびがらの皮でも容易に切斷が出来る又手

で折ることも出来る。

二、壓縮して角を丸めることも、細し太しをつけることも自由である。

三、籤竹でも、むいた皮でも容易に接合が出来る。その接合は豆と籤竹の場合よりもかへつて容易である。

四、短く切つたものを、豆細工の豆の代用として籤竹や皮で接合すれば豆細工で可能な題目は凡て出来るばかりでなく。棒のまゝ接合したり、棒と籤竹又は皮とを以て構成したりすれば更に趣の變つたものが出る。

五、大きくはいた皮を平たいまゝ使へば、更に面白いものが作り得られるし、又壓縮したり、一部分をむしり取つたりすれば彫刻的な工作さへ可能である。

六、容易に着色することが出来る。

七、他の材料との混用も、豆細工などよりは自

由である。

八、小さい兒童の趣味と筋肉の發達とに適合して居る。

以上は重なる長所に就いて述べたのであるが、然し短所もないことはない。その主なるものは次の如きものがある。

1、皮は非常に堅いから、取扱上注意しないと手を切ることがある。又皮をむく時に、その端が爪の間にさゝることがある。然し是等は注意さへすれば避けることが出来るし、又手を切ると云つても危険の伴ふ程のものではないが、短所と云へば短所である。

2、價があまり安くない。特に棒のまゝで組立てをやらせる場合には、多くの材料がある。材料を節約して小さく作れば、太短い不恰好のものとなる。然し現在賣つて居る價は少し高過ぎると思ふもつと需用が多くなれば安くなるだらうと思ふ。

然し豆細工類似の工作や、彫刻的工作を主としてやれば、あまり多くの材料を要しないから、多くの費用は要しない。

3、或る種の作品が毀れ易いことは豆細工と同様な短所を有する。

きびがら細工は以上述べ來つた如き長短を有するものであるが、その長所は短所を補つて餘りあるもので、幼稚園の手技及び小學校初學年に於ける手工材料として確實な地歩を占めて居るものと云ふことが出来る。只今の處では教材に就ての研究が充分に行はれて居ないが、漸次この方面の研究が進めば更に新なる長所を發見し得るの素地が充分に存するものなることが認められる。

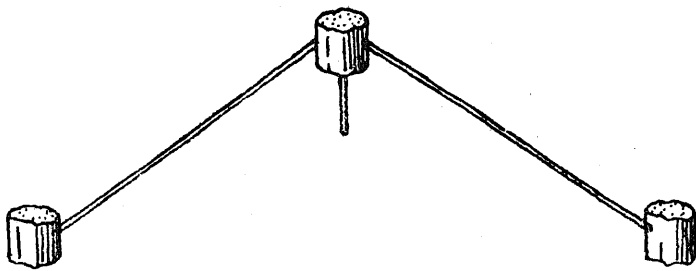
三、豆細工類似の工作法による教材

この種の教材は、豆細工の教材を直ちに移して來ればよいので、別に説明する必要もないと思はれるし、且つきびがら細工の本領とする所でもな

いから、製作例を擧げる必要もないと思ふが、この工法は材料が經濟的に用ひられるから、その點から見て少しやつて見るもよいと思ふ。然し中には單にかう云ふ意味からばかりでなく、當然この種の工法に依るべきものも多少は存するであらう。故に左に念のため二三の實例だけは擧げて見やう。然し茲に擧げる教材は合法的な一つの組織を示すのではなく、斷片的にかう云ふやうに工作するものであることを示すに止まるものである。

一、彌治郎兵衛（第一圖参照）

1皮をとつた細い「きびがら」を長さ一センチ強に缺で切つたもの三個を作る。この長さは兒童には別に寸法を示すのではない。この位の長さとして實際のものを示し目分量で切らせるのである。目分量で作らせると云ふことは眼や手の感覺を練習せしめる上に甚だ重要なことで、幼稚園や小學



第一圖

級の下級に於ては、指や其他のものにくらべて作らせることよりも一層意義あることである。

缺で「きびがら」を切るには、一氣に切り離すよりも、材料を廻し乍ら漸次周圍に切り込みをつけて行つて遂に切り離すか、相當の

深さの切込が出来た後に手で折り分けるかするが

よい。

2 籤竹又は細く割つた皮を長さ約八センチに切つたもの二本を作る。これを作るには初めの一本は目分量で作り、次の一本は初めに作つたものにくらべて作らせる。

3 籤竹又は細く割つた皮で長さ約三センチのもの一本を作る。これを作るにもこの位と云つて目分量で作らせるのである。

4 以上の材料を第一圖に示す如く結合する。この時は左右の二本の棒の角度に注意せしめる必要がある。又棒を挿す時に幾度か挿し替へる時は孔が大きくなつてうまく止まらぬことがあるから注意する要がある。

以上で出来るのであるが、左右の端に挿した「きびがら」で調節してよく平均を保つやうに修正せしめるがよい。

二、虫籠 (第二圖参照)

この教材は單に箱としてもよい。そして第二圖に示したものは長さと幅とを違つた寸法のものにしたが、長さ、幅、高さを何れも等しく作つてもよい。その工作法は次のやうにする。

1 籤竹又は皮を細く割つたもので、長さ約六センチのもの四本と、長さ約七センチのもの四本と長さ約十センチのもの四本とを作る。これ等の長さは何れも初めの一本だけは目分量で作り、あとの三本はそれに較べて作らせるのである。要するに三通の長さのものが各四本づゝ出来ればよいのである。

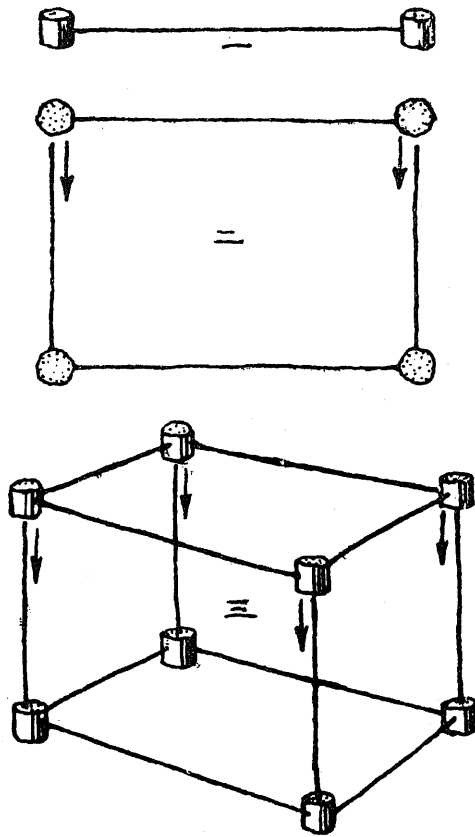
2 中位の太さの皮をとつた「きびがら」を、ほぼ直径と等しい長さに切つたもの八個を作る。

3 一番長い籤竹(又は皮)と二個の「きびがら」と第二圖一に示した球竿状のもの四つを作る。

4 第三工程で作つたものの兩端の「きびがら」の

横に最も短い籐竹(又は皮)を一本づゝ直角に挿し
てから、第二圖二に示すが如く、他の球竿状のも
のを結合して長方の枠状のものを作る。こう云ふ

5 一個の枠状のもの、四隅にある各「きびがら」
の切口に、中の長さの籐竹(又は皮)を垂直に挿し
てから、第二圖三に示す如く他の枠状のものを挿
し、歪を訂正して仕上
げる。

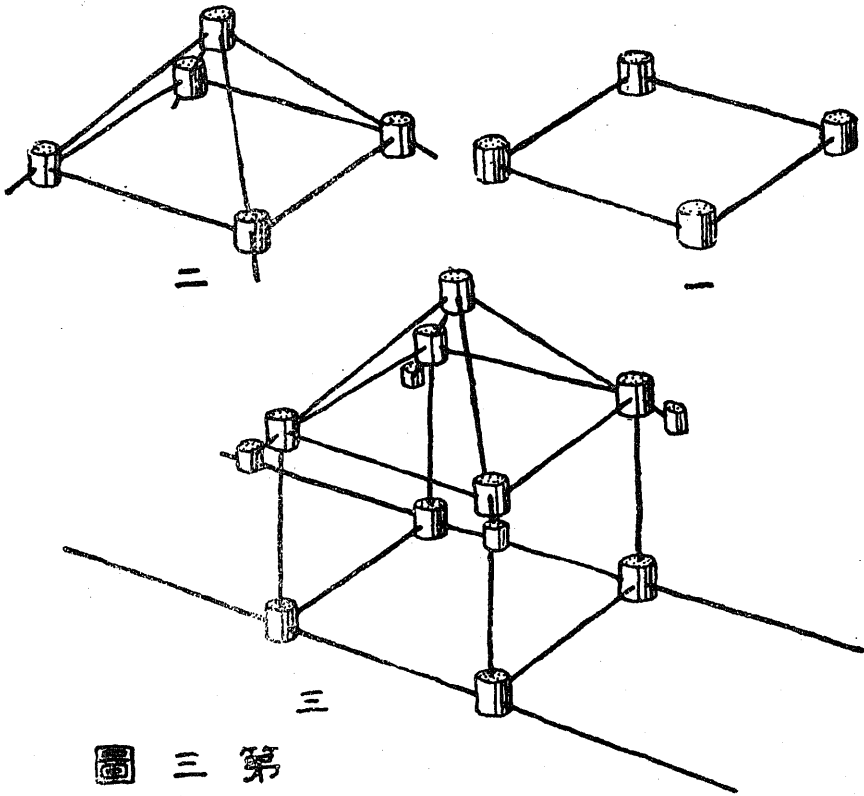


第 二 圖

6 以上説明した工作
法は甚だ合理的のもの
で、かう云ふ順序に作
るのが最も正しく出来
易いのではあるが、實
際児童に作らせるには
必ずしもこの順序に従
はないで各児童の好む
方法によつて作らせて
もよい。然し指導者は

ものは二個作るのである。そして兩方を較べて見
て形をなほして置くがよい。

合理的の方法を考へて居つて場合に應じて彼等に
示すことは大切である。



第三圖

又かゝるものは必ずしもこの通りの形に作らせるの要はないので兒童の好む形に作らせ彼等に自由に創造力の發達をせしむる餘地を存して置くの要がある。

以上二つの注意事項は單にこの教材に就てのみ重要なことではなく、全般に共通のことである。

三、おみこし (第三圖参照)

第三圖は神輿である。これを作るには次の如くする。

1 籤竹を長さ約七センチに切つたもの十本と、長さ約八センチのもの四本と、長さ約二十二センチのもの二本とを作る。こ

れ等の方法は前に於ける工作に準すればよい。

2 皮をとつた中位の太さの「きびがら」を、長さ約二センチに切つたもの九個と、極細い「きびがら」を長さ約一センチに切つたの四個とを作る。

3 第一工程に於て作つた長さ約七センチの籤竹と、第二工程で作つた大きい方の「きびがら」とで第三圖一に示す如き正方形の枠形のもの一個を作る。その工作法は前者に準ずる。

4 一つの正方形の枠の四隅の「きびがら」に、斜に長さ約八センチの籤竹を通し、中央に於て一つ残つて居る大きい方の「きびがら」を用ひて結合するこの時籤竹の端を中央の「きびがら」のなるべく下部に挿す方がよい。

5 前工程に於て作つた、幹に挿した籤竹の下方

の端に第二工程で作つた小さい方のきびがらを第三圖三に示すが如く挿す。

6 長さ約七センチの籤竹二本と長さ約二十二センチの籤竹二本と大きく切つた「きびがら」とで梯子形のものを作る。この梯子形の中央部は第三工程で作つた正方形の枠形と同じ大きにする。

7 梯子形の中央の正方形の枠の四隅の「きびがら」の切口に約七センチに切つた籤竹を垂直に挿してから、第五工程に於て作つたものを結合する。この結合法は、前課の第五工程に準ずる。

8 最後に長さ約二十二センチに切つた籤竹を第六工程で作つたものの下方に挿し第三圖に示す如くして作り上げる。